

ロシア語名詞アクセントのゆれと動態に関する 予備調査(2) —第3変化名詞—

安 藤 智 子

富山大学人文学部紀要第56号抜刷

2012年2月

ロシア語名詞アクセントのゆれと動態に関する 予備調査(2)―第3変化名詞―

安 藤 智 子

1. はじめに

現代ロシア語において、アクセントの位置にはゆれや変化が観察される。変化の最も新しい状況は実地調査を行うことによって得られるが、その試みのための予備調査として、まず文献から知られる変化の方向性や進み具合を明らかにするため、筆者は安藤 (2011) において第2変化名詞に関する調査を行った。

本稿は、安藤 (2011) に続き、第3変化名詞について文献調査によって変化の傾向を把握することを目的とする。具体的には、安藤 (2011) と同様、18世紀から20世紀中盤にかけてのアクセント変化を記述した Воронцова (1979) や、Ушаков 編 (1934-40) 等の20世紀に出版された辞書と Горбачевич (2004) 等の21世紀の辞書との比較を通じて、対象を第3変化名詞（単数主格形が硬口蓋化子音に終わる女性名詞¹⁾）とした調査を行う。他のタイプの名詞については、さらに稿を改めて論じる予定である。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、第2節において、これまでに論じられている第3変化名詞のアクセント変化の方向性について、18世紀から20世紀中盤にかけてのアクセント変化を記述した Воронцова (1979) を中心に紹介する。第3節では、第2節で扱った語彙のアクセントについて、20世紀終盤から21世紀初頭にかけて出版された辞書類においてどのように記述されているかを比較する。第4節では、21世紀に入ってから出版された正音法辞典で、アクセントのバリエーションについて「許容される」「旧式である」「廃れつつある」などの記述が豊富なロシア語の発音の「難しい点」を集めた Горбачевич (2004) に取り上げられている語彙について、ストレス位置のゆれや変化にどのような傾向が見られるかを調査する。第5節は、現代のロシア語におけるデフォルトと考えられるアクセント位置と第3節および第4節で見た変化の方向性との関係について考察し、本稿のまとめとする。

2. 18世紀から20世紀中盤のアクセント変化

本節では、18世紀から20世紀中盤にかけてのアクセント変化について文献調査をもとに記述した Воронцова (1979) を参考に、通時的研究におけるアクセント記述の枠組みとそこからの変化について先行研究をもとに述べる。

2.1. 第3変化名詞のアクセントの概要

ここではまず、ロシア語の名詞のパラダイムにおける主要なアクセント型の呼称を紹介したうえで第3変化名詞のアクセント型の概要を紹介し、後の議論の土台とする。

2.1.1. アクセント型の分類

現代においても古代においても、ロシア語における名詞のアクセントは、パラダイムを通じて同じ音節にストレスを持つ固定アクセント型と、屈折形態によりストレスの位置が異なる移動アクセント型に分けられる。固定アクセント型には、全ての屈折形態において語幹にストレスを持つものと屈折語尾にストレスを持つものがある。多くの先行研究（Зализняк (1985) 等）において、語幹にストレスを持つ固定アクセント型をA型、屈折語尾にストレスを持つ固定アクセント型をB型、移動アクセント型をC型と呼んでいる。

しかし、実際には、現代語において、単数形か複数形のどちらかだけが移動アクセントを示し、残る一方は固定アクセントを示す語が数多く存在し、そのようなパラダイムのアクセント型を示すために、単数形・複数形の順でA, B, Cの記号をそれぞれ表示する方法も用いられている（Федянина (1982) 等）。単数、複数のそれぞれの数のパラダイムの中でストレスが語幹の1か所に一貫して現れる固定アクセント型をA、各数のパラダイムの中でストレス位置に異なりが見られる移動アクセント型をCとし、単数形、複数形の順にこの記号を並べると、現代のほとんどの第3変化名詞のアクセント型は、AA型・AC型のいずれかであり、他に少数のCC型の語彙が見られる。それぞれの型の例および複数形が用いられないC0型の例を(1)に挙げる。

(1) 第3変化名詞AA型の例 *ладонь* 「手のひら」

単数主格 ла'донь-∅	生格 ла'дон-и 与格 ла'дон-и 対格 (=単数主格)
造格 ла'донь-ю	前置格 ла'дон-и
複数主格 ла'дон-и	生格 ла'дон-ей 与格 ла'дон-ям 対格 (=複数主格)
造格 ла'дон-ями	前置格 ла'дон-ях

第3変化名詞AC型の例 *площадь* 「広場」

単数主格 'площадь-∅	生格 'площад-и 与格 'площад-и 対格 (=単数主格)
造格 'площадь-ю	前置格 'площад-и
複数主格 'площад-и	生格 площад-'ей 与格 площад-'ям 対格 (=複数主格)
造格 площад-'ями	前置格 площад-'ях

第3変化名詞CC型の例 *грудь* 「胸」

単数主格 'грудь-∅	生格 груд-'и 与格 груд-'и 対格 (=単数主格)
造格 'грудь-ю	前置格 груд-'и

複数主格 'груд-и	生格 груд-'ей	与格 груд-'ям	対格 (=複数主格)
造格 груд-'ями	前置格 груд-'ях		
第3 変化名詞 C0 型の例 <i>любовь</i> 「愛」			
単数主格 лю'бовь-∅	生格 любов-'и	与格 любов-'и	対格 (=単数主格)
造格 лю'бовь-ю	前置格 любов-'и		

AA型のストレス位置は一貫して語幹の中のいずれかの音節であり、AC型の単数形は通常、一貫して語頭音節にストレスを持つ。AC型の複数形およびCC型では(2)に示すようにストレスが移動する。この中で、単数主格形(=対格形)はゼロ語尾を持つため、このゼロ語尾が本来ストレスを持つべきところ、音節を成さないために語幹にストレスが移動している仮アクセントであるという見方もできるが、ここでは現代語の語形からとらえられる事実として(2b)のように記しておく。

ただし、単数形でストレスが移動する型で2つ以上の音節から成る語幹(以下、多音節語幹)を持つのは、2音節語幹を持つ*любовь*「愛」の1語のみであると見られる。しかし、(1)で見たように、この語が2音節語幹を持つのは単数主格形(=対格形)と造格形のみであり、他の語形では出沒母音により1音節語幹となる。したがって、第3変化女性名詞では1語の中のストレス位置の可能性は多くて2か所(AC型で語頭音節(2a)と屈折語尾の第1音節(2c)、CC型で語幹末音節(2b)と屈折語尾の第1音節(2c))ということになる。

(2) 第3 変化名詞移動アクセント型におけるストレスの配置

- a. 語頭音節：複数主格形(およびこれに等しい対格形)
- b. 語幹末音節：単数形におけるC型…主格形(=対格形)・造格形
- c. 屈折語尾の第1音節：単数形におけるC型…生格形・与格形・前置格形
 複数形におけるC型…生格形・与格形・造格形・前置格形

なお、第3変化名詞では、第1変化の男性名詞とともに、単数前置格形において結合する前置詞の種類により異なる位置にストレスを持つ場合がある。このうち、普通、前置詞 *на* あるいは *в* に支配されて格語尾にストレスを持つ語形は第2前置格と呼ばれる。第1変化男性名詞の場合に通常の前置格(例、*о 'сад-е*「庭について」)と第2前置格(例、*в сад-'у*「庭で」)で格語尾の形態が異なるのとは対照的に、第3変化女性名詞はストレスの位置のみで通常の前置格と第2前置格が区別される(例、*о 'ноч-и*「夜について」、*в ноч-'и*「夜に」)。第2前置格はすべての第3変化名詞に現れるわけではなく、それぞれの語について意味や音韻などから第2前置格の有無を推定することはできない。本稿では、この予備調査によってまず全体的な傾向

を見るため、第2前置格の問題については考察の対象外とする。

2.1.2. 各アクセント型の所属語彙とゆれ

各アクセント型の所属語彙の分布を見ると、語幹固定アクセント（A型）が圧倒的多数を占める。古代ロシア語における移動型については、Воронцова (1979) が通時的な先行研究 Колесов (1972) を元に非派生語の所属語彙をリストアップしている。それによると、第3変化名詞の移動型は81語である（2.2.節(3)および(4)を参照のこと）。

一方、借用語や派生語を多く含む現代語について、Федянина (1982) は第3変化の女性名詞の各型の所属語彙数を次のように見積もっている。AA型 3100語、AC型 75語、C0型（単数形が移動アクセントを示し、複数形が用いられないタイプ）5語である。C0型とされたのは、*глушь, любовь, вошь, ложь, рожь* であり、最初の1語を除く4語の語幹が出没母音を持ち、生格形・与格形・前置格形が *любв-'и, вш-'и, лж-'и, рж-'и*、造格形が *лю'бовь-ю, 'вошь-ю, 'ложь-ю, 'рожь-ю* となる。このうち、主格形（＝対格形）が単音節語幹を持つ *вошь, ложь, рожь* は生格形・与格形・前置格形において語幹が音節を成さず、必然的に語尾にストレスが置かれるためにC0型と呼ばれることになる。なお、Федянина (1982) はCC型を挙げていないが、これはこれらの5語のうち *вошь* 以外は複数形で用いられないとされているためである。しかし、後述するように、現代の辞書では *вошь* に加えて *глушь* と *рожь* の複数形を挙げているものや、Федянина (1982) がAC型とした *грудь* や *ось* 等の語をCC型としているものがあるため、本稿ではФедянина (1982) におけるC0型をCC型の下位区分として扱うことにする。また、*вошь* や *рожь* は複数形で語幹の母音が消えるため、必然的に複数形が語尾固定アクセントとなることから実質的にCB型となるが、これも3.1.2節で見るようにCC型の下位区分として扱う。

上述のとおり、現代語のアクセントにはゆれが頻繁に観察されるため、このФедянина (1982) のデータも唯一絶対のものではないが、現代語の傾向を見ることはできる。すなわち、多くの派生語や借用語を含むAA型がやはり圧倒的多数を占める。

なお、AA型については、生産的であって語彙を網羅的に列挙することが困難なため、第2節中では扱わないことにする。

2.2. 通時的研究に見る移動アクセント型の変遷

Воронцова (1979) は、通時的研究を元に選定した各アクセント型所属語彙を、18世紀以降の詩において例証するほか、19世紀の文法書 Востоков (1831)、19世紀前半を扱った Булаховский (1954)、Чернышев (1908) 等の先行研究および20世紀中盤までの辞書（Ушаков編 (1934-40)、Аванесов, Ожегов編 (1959)）における記述と比較している。このうち、本節では移動アクセント型として挙げられた語彙について紹介する。

第2 変化名詞に語幹固定アクセント (баритонированная акцентная парадигма), 語尾固定アクセント (окситонированная акцентная парадигма), 移動アクセント (подвижная акцентная парадигма) があつたのとは異なり, 第3 変化名詞の場合, Колесов (1972) によれば, 古代ロシア語において, окситонированная акцентная парадигма と подвижная акцентная парадигма は新たな移動アクセント型 подвижно-окситонированная акцентная парадигма (以下, ПО型) に統合されていたと見られている。

Колесов (1972) はこの ПО型に属する名詞を (3) の単音節語幹語 68 語と多音節語幹語 8 語, (4) の複数形のみが通常用いられる語 (pluralia tantum) 5 語としている (表記は Воронцова (1979) による現代語の綴りに従う)。なお, 複数形のみが用いられる (4) は性の区別が必ずしも明確でなく, 以後の文献においてこれらが第3 変化名詞として扱われているかどうか判然としないため, 本稿では以下の考察から除外する。

(3) борть, брань, бровь, вервь, вершь, весь, весть, вещь, власть (волость), вонь, вошь, гать, горсть, грань, грудь, грязь, дань, дверь, дебрь, дробь, желчь, клеть, кость, кровь, кузнь, лесь, ложь, мазь, масть, месь, мощь, мочь, ночь, пасть, персть, печь, плеть, плешь, плоть, полсть, пыль, пядь, речь, рожь, Русь, сельдь, сень, сеть, скорбь, сласть, смерть, соль, стень, степь, страсть, сыть, тварь, твердь, тень, трость, цепь, часть, честь, чудь, шерсть, щель, щеть; голень, ересь, лошадь, осень, печень, площадь, селезень, четверть

(4) дети, люди, перси, сани, сени

この ПО型は, 大部分の語で複数主格形が語幹に, 複数生格形が語尾にストレスを持っていたという点では現代語の AC型および CC型のふるまいと一致する。しかし, Колесов (1972) の資料が示す古代語において, 単数形を含む他の語形では, 語によってストレス位置が語幹か語尾かで使い分けがあつたりゆれが見られたりして混沌としており, 現代語とそのまま比較することができない。

その後, 単数形のパラダイムでは, Воронцова (1979: 69) によれば, 主格形に倣って他の格も語幹に一貫してストレスを持つ平均化が生じたとされる。韻文などの資料では18世紀以降も語尾にストレスを置く例が見られるが, Востоков (1831) によれば, 18世紀末から19世紀初頭の時点において, 生格形および与格形でストレスが語尾に置かれるのは規範的ではなかったという。つまりこの時, CC型は例外的な存在であり, 単数形におけるストレスの移動はほとんど第2 前置格においてしか見られなくなっていたということであり, 第2 前置格形を無視すれば, この時期にすでに AC型が移動型の中で優勢だったということになる。

複数形については, Колесов (1972) および Воронцова (1979) によれば, 古代語における ПО

型は、主格形で語幹，生格形で語尾にまとまっているほかは混沌としていたが，その後，生格形以下で単数形と対立する語尾アクセントへの収束が進んだという。

現代語への変遷を見るため，時代を下り，これを Востоков (1831) において複数主格形で語頭音節，複数生格形以下で語尾にストレスを持つとされる移動型の語のリスト (5) と比較しよう。単音節語幹語 46 語，多音節語幹語 16 語がここに含まれる。

(5) бровь, вервь, весть, ветвь, вещь, власть, горсть, грудь, дверь, десть, дробь, жердь, зыбь, кисть, клеть, кость, кровь, масть, мель,мышь, ночь, ось, паршь, пасть, печь, плеть, полсть, пядь, речь, связь, сельдь, сеть, сласть, смерть, снасть, соль, стать, степь, страсть, тень, треть, трость, цепь, часть, честь, шерсть; ведомость, волость, доведь, должность, крепость, лошадь, новость, область, площадь, подать, проповедь, скатерть, степень, стерлядь, церковь, четверть

また，これと合わせ，さらに時代を下って Ушаков (1934-1940) の辞書と比較すると (6) のようになる。表 (6) において，(3) および (5) の列の「+」はそれぞれ Колесов (1972) と Востоков (1831) において移動型として挙げられている語であることを指し，「-」は挙げられていないことを指す。つまり，(6a) はこの 2 つの文献で共に移動アクセントとされた語が Ушаков の辞書においてどのように記述されているかを示しており，(6b) は Колесов (1972) で ПО 型として挙げられたが Востоков (1831) のリストには入っていなかった語がどうなったかを示しているという具合である。また，「Ушаков の辞書における記述」の列における型名では，「XY 型」の $X=\emptyset$ の場合は単数形が用いられず， $Y=\emptyset$ の場合は複数形が用いられないものとされている語のアクセント型を指す。また，多音節語幹語を含む型のみその語数を [] に入れて内数で示す。なお，(6a) のうち *вервь* 1 語は，Ушаков および本稿で参照した 20 世紀以降の辞書 4 種のいずれにも掲載されておらず，(6b) の 5 語 (*вершь, кузнь, Русь, сыть, щеть*) と (6c) の *доведь, паршь* の 2 語もこれらの辞書に掲載がない。

(6) Колесов (1972) と Востоков (1831) および Ушаков の辞書の比較

	(3)	(5)	該当語数	Ушаков の辞書における記述
a	+	+	35 語 語幹音節数別語数： 1 音節－32 語 2 音節－3 語	AC 型：30[3] 語（うち AA 型を旧式とするもの 1 語 тень） AA/AC 型で意味の区別あり：1 語 соль AA 型：3 語 дропь, пасть, часть 掲載なし 1 語
b	+	－	39 語 語幹音節数別語数： 1 音節－34 語 2 音節－4 語 3 音節－1 語	CC 型：2 語 вошь, рожь AC 型：2 語 скорбь, щель AA 型：13[3] 語 A∅ 型：13[1] 語 C∅ 型：1 語 ложь ∅A 型：1 語 дебри 語尾固定型数詞：1 語 пять 男性名詞とされた語：селезень 1[1] 語 掲載なし 5 語
c	－	+	27 語 語幹音節数別語数： 1 音節－14 語 2 音節－11 語 3 音節－2 語	AC 型：21[10] 語（うち AA 型を旧式とするもの 2[1] 語 ведомость, ветвь） AA 型：мель, связь 2 語 AA ～ AC 型のゆれ：проповедь 1[1] 語 A∅/AC 型で意味の区別あり：крепость 1[1] 語 掲載なし 2[1] 語

(6) を見ると、古代語の (3) で ПО 型 (+) とされた a, b のうち、19 世紀の (5) でも複数形における移動型 (+) が引き継がれている語 (a) は半数に満たず、新たにこの型に属する語 (c) がそれに匹敵するほどに生じている。このことから、Воронцова (1979: 77) は、この移動型が生産的になっていると指摘し、Востоков (1831) が挙げた語以外にも多くの多音節語において複数生格以下の語形で語尾にストレスが置かれる例を 18 世紀および 19 世紀の韻文から挙げている。

一方で、(6b) の (3) ПО 型 (+) から変化して (5) で複数形が移動アクセントでなくなった語 (－) はさらに多い (39 語)。このタイプのうち複数形における移動アクセントが Ушаков の辞書において復活している語もわずかにあるが、現在も女性名詞として用いられている 32 語のうち半数近く (13 語) は、Ушаков の辞書においても AA 型となっており、単数形と対立しない語幹固定型への変化の流れもあると言える。しかし、複数形が用いられないことが明記された語も 14 語とかなりの割合を占めている。

表 (6) に算入されている語のうち、多音節語幹語のアクセント型の推移を (7) に示す。これを見ると、多音節語で変化したものは (5) の段階で全て変化しており、Ушаков の辞書でもそれ

が引き継がれていることがわかる。そして、アクセント型を保った語(7a)と変化させた語(7b, c)の間にも、移動型になっているもの(7a,c)と語幹固定型になっているもの(7b)との間にも、特に音韻、意味あるいは語構成上の対照は見受けられない。強いて言えば、(7c)に形容詞語根を持つ語(すなわち -ость で終わるもの)が含まれることくらいである。

(7) 表(6)中の多音節語幹語のアクセント型の変遷

- a. (6a)の多音節語幹語: лошадь「馬」, площадь「広場」, четверть「4分の1」→ Ушаковの辞書においてすべてAC型
- b. (6b)の多音節語幹語: голень「脛」, ересь「異端」, осень「秋」→ Ушаковの辞書においてAA型; печень「肝臓」→ Ушаковの辞書においてA0型
- c. (6c)の多音節語幹語: ведомость「目録」, волость「郷」, должность「義務」, новость「ニュース」, область「州」, подать「賦税」, скатерть「テーブルクロス」, степень「階段, 段階」, стерлядь「チヨウザメ」, церковь「教会」→ Ушаковの辞書においてAC型; проповедь「説教」→ Ушаковの辞書においてAA～AC型併記; крепость→ Ушаковの辞書において「強度」の意でA0型,「権利書, 要塞」の意でAC型; доведь→ Ушаковの辞書に掲載なし

こうしたことから、現代では古代語との型の対応が希薄になっており、単音節語幹語は移動型から固定アクセント型への変化と共にその逆の変化も少なくなく、特に多音節語幹語のアクセント型が早い時期に変化したと見られる。

3. 現代の辞書における移動型の変遷

本節では、第2節で扱った語彙のアクセントが、Ушаковの辞書以降、現代の辞書類においてどのように記述されているかを見ることにより、AC型およびAA型への変化がさらに進んでいるのか否か、あるいはこれ以外の変化が生じているのか、どのような語彙にどのタイプの変化が起きているのかを見ていく。ただし、(3)のリスト内の語彙のうち *вервь*, *вершь*, *кузнь*, *Русь*, *сыть*, *щеть*, (5)のうち *вервь* ((3)とも重複), *доведь*, *паршь* は、参照した20世紀終盤以降の辞書に載っていないため、観察の対象外とする。

21世紀に入って出版された辞書類のうち、Резниченко(2008?)²⁾はまさにアクセントを調べるためのものであり、掲載された項目のうちの多くにおいてパラダイム全体のストレス位置やパラダイムのアクセント型を示す記号が示されている一方、掲載語数が少ないという難点がある。このРезниченко(2008?)と網羅的な正語法辞書であるИванова(2004)は、アクセントのバリエーションに関して、ほとんどの場合にどのバリエーションがより規範的であるかという注記がなく、単にゆれとして併記している。一方、発音や屈折形態等の間違いやすいも

のを集めたГорбачевич (2004) は規範性において等価なゆれ (... и ...) だけでなく、より古い形式 (устарелое「廃れた」, устаревающее「廃れつつある」), より新しい形式 (допустимо「許容される」, не рекомендуется「勧められない」), 正しくない形式 (неправильно), 特定の職業や専門分野の人の発話において用いられる形式など、様々な種類の注記が記載されている。そして、これら3種の辞書における記述は、一致の様相が語によって異なり、それぞれにおいて最も望ましいとされるアクセントがゆれを含めて一致する語もあれば、いずれか2種の辞書が同じでもう1種が異なるアクセント型を提示する語もある。

また、これらの21世紀の辞書とВоронцова (1979) で扱われていた20世紀半ばまでの記述との間の時期として、20世紀の最後の四半世紀に発行された辞書 Розенталь, Теленкова (1976) およびБорунова и т. д. (1983) を参照する。この2種の辞書のうち、前者はГорбачевич (2004) と同様に間違いやすいものを集めたものであり、網羅的な正語法辞書である後者のほうがより掲載語が多い。

本節では、これらの21世紀初頭の3種、20世紀終盤の2種の辞書が、Воронцова (1979) が詳しく取り上げたУшаков編 (1934-40) と比べてどのようにアクセントを記述しているかを検討する。

なお、辞書類にパラダイム全体のアクセントが示されていない場合、一般に、単数主格・生格・与格・対格・造格・前置格・複数主格・生格・与格・造格・前置格の順に、前に記載された語形のストレス位置から類推するという前提がある。このため、例えば見出し語としての単数主格形と並んで複数生格形のストレス位置しか記載されていない場合は、単数形全体および複数主格形が単数主格形と、複数生格形以下が複数生格形と同じ位置にストレスを持つという解釈を行う。

3.1. 旧 ПО 型の記述

第2節 (6) で見たように、旧 ПО 型と考えられた語の半数以上はВостоков (1831) において既に固定型に変化していた。具体的には、複数形での移動型を保っていたものが35語あった一方で、語幹固定型とされたものが39語あった。以下ではこれを分けて、Ушаковの辞書以降の現代における記述を見ていくことにする。

3.1.1. 19世紀の文法書において複数形移動型が引き継がれた語の変遷

ここでは、(6a) で見た、旧 ПО 型と考えられた語のうちでВостоков (1831) において複数形での移動型を保っていたとされる語について検討する。(6a) には35語が含まれるが、Ушаковの辞書では*вервь*「(旧)縄, (史)古スラブ人の共同体」が掲載されておらず、現代の他の4種の辞書でも取り上げられていないため、除外し、対象は34語とする。

まず、Ушаковの辞書において AA 型とされた3語のうち*пасть*「獣の顎」は、現代の辞書で

はБорунова и т. д. (1983)とИванова (2004) にしか掲載されていないが、そのどちらもУшаковの辞書と同様にAA型としている。一方、3語のうち*дропь*「散弾」と*часть*「部分」は、掲載するすべての現代の辞書においてAC型とされている。このことから、この2語は20世紀前半のУшаковの辞書でいったんAA型となったものが、移動型を復活させていると見ることができる。

次に、Ушаковの辞書において「AA/AC型で意味の区別あり」とされた1語*соль*は、第一に挙げられる意味が「塩」であり、これはAC型のアクセントが掲載されている。第二の意味は「舌平目」であり、これは変化形として‘соли’（単数生格形および同形の与格形・前置格形と考えられる）のみが挙げられている。これに対して、参照した現代の辞書ではこの意味の区別が明らかではない。このうちИванова (2004)は‘вещество’「物質」との注記から「塩」の意と考えられる見出し*соль1*をAA型で挙げるほか、‘но́та’（音符）の注記を伴った「(音階の) ソ」の意味の*соль2*の見出しを挙げているが、これは不変化の中性名詞である。Борунова и т. д. (1983)は*соль1*をAC型で挙げるほかに、不変化の*соль2*を挙げているが、「舌平目」なのか、また「(音階の) ソ」を意味する別の語のなのかが不明である。一方、Розенталь, Теленкова (1976)とГорбачевич (2004)は見出し語を1つだけ挙げてAC型としており、後者はAC型のほかに旧式としてAA型を挙げている。

さらに、Ушаковの辞書においてAC型とされた30語は、次のように記述されている。まず、全体的にはAC型を引き継いでいるもの(*лошадь*「馬」、*смерть*「死」など)が多いが、辞書により、複数形で語幹固定型(AA型)が提示されている数語と、単数形における移動型(CC型)が提示されている数語がある。

このうち、単数形が語幹固定型で複数形の記載がない(複数形が用いられない語は一部の辞書で別途記載されているので、ここに挙げる語は複数形を持つものとみなす)ことによりAA型とみなされる記述があるのは、*власть*「権力」(Борунова и т. д. (1983)とИванова (2004)でAA型、Розенталь, Теленкова (1976)はAC型)、*кровь*「血」(Розенталь, Теленкова (1976)、Борунова и т. д. (1983)、Резниченко (2008?)でAA型、他2辞書はAC型)、*сладость*「砂糖菓子」(Ушаковの辞書では*сласть*；Иванова (2004)でAA型、Борунова и т. д. (1983)とРезниченко (2008?)はAC型)、*честь*「名誉」(4辞書でAA型、Горбачевич (2004)はAC型)、*шерсть*「獣毛」(Иванова (2004)でAA型、他の4辞書ではAC型)の5語である。これらの語について、Иванова (2004)はAA型としている語が多く、Горбачевич (2004)はAA型を認めていないといった辞書ごとの差異はあるが、年代による特徴は認められない。また、辞書により複数形における語幹固定型(AA型)のバリエーションが明記されているのは、*полость*「空洞」と*сельдь*「鯧」の2語である。*полость*(Ушаковの辞書では*полсть*)についてはГорбачевич (2004)がAC型とAA型を併記しているが、AA型はРозенталь, Теленкова (1976)で正しくない、Борунова и т. д. (1983)で薦められないとされている。*сельдь*をAA型とするのはИванова (2004)の記述のみであり、この

語は他の辞書（Борунова и т. д. (1983) と Резниченко (2008?)）では AC 型とされる。

一方、以上の7語は、*полость* を除くと、1つの辞書の中でアクセントのバリエーションが提示されておらず、辞書ごとに違いがあることから、規範がまとまっていないように見える。調査が及んでいないが、複数形の使用頻度がこの問題に絡んでいる可能性がある。

なお、複数形については、このほか、AC 型を規範としながら各辞書の中で AA 型のバリエーションと注記が示されている語が4つあり、AA 型を正しくないとする辞書がある2語 (*горсть*, *сеть*) を除くと、残りは *площадь* と *тень* である。そのうち、*площадь* 「広場」において AA 型が廃れつつあるとされ、Ушаков の辞書でも AA 型が旧式とされていた *тень* 「陰」は Розенталь, Теленкова (1976) と Горбачевич (2004) においてやはり AA 型が旧式とされていることから、この2語は AA 型から AC 型への変化の途上にある可能性があると考えられる。

単数形で移動型が示されている CC 型は3語あり、そのうち *грудь* 「胸」については、Иванова (2004) は CC 型のみを挙げ、Розенталь, Теленкова (1976) は CC 型に加えて AC 型を許容している。Борунова и т. д. (1983) も CC 型を挙げ、旧式としながら AC 型を許容しており、Горбачевич (2004) も同様に AC 型を廃れつつある形として挙げている。一方、*печь* 「暖炉」と *степь* 「ステップ」はどの辞書も AC 型を挙げているが、*печь* は21世紀の3種の辞書が CC 型を許容または併記しており、*степь* は Резниченко (2008?) のみが CC 型を併記している。

表 (8) に (6a) の語彙の現代における記述をまとめる。

(8) 19 世紀の文法書において複数形移動型が引き継がれた語の変遷のまとめ

(3)	(5)	Ушаков の辞書における記述	現代の辞書における記述
+	+	AA 型：3 語 <i>дропь</i> , <i>пасть</i> , <i>часть</i>	AA 型：1 語 <i>пасть</i> AC 型：2 語 <i>дропь</i> , <i>часть</i>
		AA/AC 型：1 語 <i>соль</i> 「舌平目」/ 「塩」	AC 型が優勢： <i>соль</i> 1 語（おそらく「塩」の意）
		AC 型：30[3] 語（うち AA 型を 旧式とするもの 1 語 <i>тень</i> ）	AC 型：18[2] 語 <i>лошадь</i> , <i>смерть</i> など AA 型→AC 型の変化途上？：2[1] 語 <i>площадь</i> , <i>тень</i> AA ~ AC 型：7[2] 語 <i>власть</i> , <i>полость</i> , <i>сладость</i> など AC 型→CC 型の変化途上？：3 語 <i>грудь</i> , <i>печь</i> , <i>степь</i>

なお、語幹音節数に注目してみると、現代の語形では多音節語幹語は5語となる。このうち *лошадь* と *четверть* は Ушаков の辞書以来 AC 型で安定しているが、*площадь* は AA 型から AC 型の変化途上と見られる記述があり、*полость* と *сладость* は AA 型と AC 型の間でゆれているように見られる。本節で扱った範囲では、これだけの例で語幹音節数が変化に関与していると証明できるわけではない。

3.1.2 19世紀の文法書において複数形移動型とされなくなった語の変遷

ここでは、(6b) で見た、元 PO 型と考えられた語のうちで Востоков (1831) において複数形が移動アクセント型のリストに入れられなかった語について検討する。(6b) には 39 語が含まれるが、Ушаков の辞書では 5 語 (*вершь, кузнь, Русь, сыть, щеть*) が掲載されておらず、現代の他の 4 種の辞書でも取り上げられていないため、除外する。このほか、Ушаков の辞書以降男性名詞として第 1 変化をするとされる *селезень* 「雄鴨」と単数形変化のみの数詞 *пять* 「5」も除外し、対象は 32 語とする。

まず、Востоков (1831) の複数形移動型のリストになく、Ушаков の辞書でも AA 型とされた語は 13 語あるが、現代の辞書でもそのすべてが AA 型とされている。このうち、Розенталь, Теленкова (1976) では複数形のアクセントをいずれの語についても記載していないことによって複数形の語幹固定アクセントが推定されるが、他の辞書では、Борунова и т. д. (1983) における *грязь* 「泥」、*дань* 「貢物」、*сень* 「木陰」、Иванова (2004) における *грязь*、Резниченко (2008?) における *сень* を除き、複数形が語幹固定型であることが明記されている。

さらに、Ушаков の辞書で A0 型とされた語も 13 語あるが、現代の辞書でもそのすべての単数形が語幹固定型とされる。ただし、Борунова и т. д. (1983) における *печень* 「肝臓」と Иванова (2004) における *твердь* 「硬いもの」は語幹固定型の複数形が明示されている。Ушаков の辞書では複数形が用いられないことが ‘мн. нет’ (複数形なし) などの注記によって明示されているが、現代の辞書では語幹固定型の複数形のアクセントがほとんど明示されていないため、複数形の用いられる可能性や頻度に変化があったのかどうかはこれらの資料からは判断できない。しかし、この *печень* と *твердь* のように現代の辞書において複数形が明示されているものについては、語幹固定アクセントのまま複数形が用いられるように変化してきたことが窺える。

ここで、語幹音節数に注目すると、AA 型に 3 語 (*голень* 「すね」、*ересь* 「異端」、*осень* 「秋」)、A0 型に 1 語 (*печень*) の多音節語幹語があるが、*печень* で上述のように複数形の使用が広がった可能性があるほかは、アクセントの記述に変化は見られない。

なお、Колесов (1972) の複数形移動型のリストに単数形が挙げられていた *дебрь* については、Ушаков の辞書では複数形 ‘дебр-и」 「密林」のみが 0A 型として記述され、現代の辞書においてもこの記述が引き継がれている。

次に、Востоков (1831) の複数形移動アクセント型所属語彙のリストから漏れながら Ушаков の辞書において AC 型とされた *скорбь* 「哀愁」、*щель* 「裂け目」の 2 語は、現代の辞書でも AC 型が規範とされている。このうち *скорбь* は Розенталь, Теленкова (1976) で AA 型ではないという注記が付けられており、Горбачевич (2004) では複数生格形は語尾にストレスを持つ語形のみが挙げられているが、複数与格形では語尾にストレスを持つ形と語頭にストレスを持つ形が併記されている。この他の 3 種の辞書においては AC 型のみが挙げられている。一方、*щель* に

ついては、Иванова (2004) と Резниченко (2008?) は AC 型のみを挙げ、Борунова и т. д. (1983) と Горбачевич (2004) は AC 型を規範として AA 型は「薦められない」としている。

さらに、Ушаков の辞書で CC 型とされた *вошь* 「しらみ」、*рожь* 「ライ麦」の 2 語および C0 型とされた *ложь* 「嘘」1 語は、唯一の語幹母音が出没母音であって単数主格 'вошь, 単数生格 вш-'и になるため、単数形では必然的にストレス位置が移動する。また、複数形は、実際にはすべての格で語幹の母音が実現しないため語尾にストレスが置かれ (例えば вш-'и, вш-'ей, вш-'ам...), 複数形は移動型 (CC 型) と言うより語尾固定アクセント (CB 型) と呼ぶほうが実態に合っている。しかし、前節で見た現代の辞書における *грудь* の CC 型アクセント ('груд-и, груд-'ей, груд-'ям...) と同じものが仮アクセントによって主格形も語尾にストレスを置いていると見做して、CC 型の下位区分と見ることができる。

(9) に (6b) の語彙の現代における記述をまとめる。

(9) 19 世紀の文法書において複数形移動型とされなくなった語の変遷のまとめ

(3)	(5)	Ушаков の辞書における記述	現代の辞書における記述
+	—	AA 型: 13[3] 語 голень, грязь など	AA 型: 13[3] 語
		A0 型: 13[1] 語 брань, печень など	A0 (~ AA) 型: 13[1] 語
		0A 型: 1 語 дебри	0A 型: 1 語 дебри
		AC 型: 2 語 скорбь, щель	AC 型: 2 語 скорбь, щель
		CC 型: 2 語 вошь, рожь C0 型: 1 語 ложь	CC 型: 3 語 вошь, рожь, ложь

3. 2 19 世紀の文法書において新たに複数形移動型とされた語の変遷

ここでは、(6c) で見た、Востоков (1831) において複数形が移動型とされる語のうち ПО 型のリストになかったものについて検討する。(6c) には 27 語が含まれるが、Ушаков の辞書では 2 語 (*доведь*, *паршь*) が掲載されておらず、現代の他の 5 種の辞書でも取り上げられていないため除外し、対象は 25 語とする。

まず、Ушаков の辞書において *мель* 「浅瀬」、*связь* 「関係」の 2 語は単数形のみが明示され、AA 型であると推定されるが、現代の 4 種の辞書においては複数形も語幹固定アクセントの AA 型であることが明示されている (Розенталь, Теленкова (1976) のみ *связь* の複数形を明示していない)。よってこの 2 語は 19 世紀の Востоков (1831) でのみ複数形が移動型であったと見られる。

次に、*проповедь* 「説教」は Ушаков の辞書においては複数形で移動型と語幹固定型が併記され、その段階ではゆれていたとみられるが、現代の辞書においては AA 型とされている。Аванесов, Ожегов (1959) で既に複数形が移動型ではない (не -'ей) との注記があり、その後の Розенталь, Теленкова (1976) と Горбачевич (2004) でも移動型に対して正しくないとする注記が付けられて

いることから、Востоков (1831)に反映された時代の移動型が20世紀前半にかけて規範性を失っていったものと見られる。

また、*крепость* は、Ушаковの辞書において意味によって3つに区分され、「強度」の意味では複数形が用いられずA0型、「権利書」「要塞」の2つの意味ではAC型とされていた。この区分については、現代の辞書のうち、意味を分けているものにおいては同様に記述されている。しかし、複数形について、用いられる場合には移動型アクセントと考えれば、意味の区別を無視してAC型にまとめて扱うことができよう。現代の辞書では、Горбачевич (2004)がAA型を廃れつつあると注記している他は、すべてにおいてAC型のみが挙げられている。

さらに、Ушаковの辞書においてAC型が規範とされた21語のうち、特殊な*ось*「軸」を除く20語は、単数形での語幹固定アクセントは安定している。複数形では全体として移動型が支配的であり、特に*волость*「郷」、*десть*「紙一帖」、*жердь*「棒」、*зыбь*「大波」、*мышь*「鼠」、*стать*「体格」、*степень*「程度」、*треть*「3分の1」、*церковь*「教会」の9語は現代のどの辞書でもAC型のみを挙げているし、*кисть*「画笔」、*скатерть*「テーブルクロス」の2語はAC型のみを挙げるか、もしくはAC型の規範に加えてAA型を正しくない、もしくは薦められないものとして挙げているので、これら11語は規範としてはAC型のみになっていると言えよう。また、*новость*「ニュース」、*область*「領域」およびУшаковの辞書でAA型を旧式として挙げられていた*ветвь*「枝」の計3語も規範としてはAC型のみとなっており、20世紀の辞書ではAA型が正しくないという注記を持つ辞書があるほか、Горбачевич (2004)では旧式とされていることから、AA型の出現が近年減ってきていることが窺える。

これに対し、残る6語は、複数形で移動型の他に語幹固定型を許容あるいは併記する辞書がある。中でも*пядь*「指尺」、*подать*「賦税」はАванесов, Ожегов (1959)ではAA型が正しくないとされているが、その後の辞書ではすべて許容もしくは併記されている（ただし、Розенталь, Теленкова (1976)は俗語的としている）。また、*снасть*「漁具」はГорбачевич (2004)、*должность*「職務」はБорунова и т. д. (1983)、Горбачевич (2004)、Резниченко (2008?)でAA型が併記または許容されている（他の辞書ではAC型のみ）。*стерлядь*「チョウザメ」は20世紀の辞書ではAA型が正しくない、あるいは薦められないとされているが、Горбачевич (2004)はAC型とAA型を併記している。そしてГорбачевич (2004)ではAA型が併記され、Ушаковの辞書でAA型を旧式として挙げられていた*ведомость*「目録」もАванесов, Ожегов (1959)とРозенталь, Теленкова (1976)はAA型が正しくないとし、Борунова и т. д. (1983)では許容、Горбачевич (2004)、Резниченко (2008?)では併記されていることから、これらの語はAA型の許容度が増してきていると考えられる。

Ушаковの辞書においてAC型が規範とされた21語のうち、*ось*「軸」の1語は単数形の推移に特殊性が見られる。複数形では現代のすべての辞書で移動型となっており（Аванесов,

Ожегов (1959)とРозенталь, Теленкова (1976)では語幹固定型を正しくないと注記している), Ушаковの辞書と同じである。一方, 単数形では, Аванесов, Ожегов (1959)とРозенталь, Теленкова (1976)ではУшаковの辞書と同様に語幹固定型としたうえで, 移動型を正しくないとしているのに対し, Борунова и т. д. (1983), Иванова (2004), Горбачевич (2004)では移動型が許容され, Резниченко (2008?)は語幹固定型と移動型を併記している。辞書の年代から言えば, 20世紀最後の四半世紀で単数形の移動型が規範性を増してきたと言える。

ところで, 本節で扱った範囲の語彙には比較的多くの多音節語幹語が含まれている。これは, Колесов (1972)のПО型のリスト(3)には多音節語が少なかったのに対して, Востоков (1831)のリストには多く含まれるようになったということである。この範囲では, Ушаковの以降の辞書の記述には語幹音節数によるアクセント型やその変化の様相の偏りは見いだせない。

(10)に(6c)の語彙の現代における記述をまとめる。

(10) 19世紀の文法書において新たに複数形移動型とされた語の変遷のまとめ

(3)	(5)	Ушаковの辞書における記述	現代の辞書における記述
—	+	AA型: 2語 <i>мель, связь</i>	AA型: 2語 <i>мель, связь</i>
		AA ~ AC型のゆれ: 1[1]語 <i>проповедь</i>	AA型: 1語 <i>проповедь</i>
		A0/AC型: 1[1]語 <i>крепость</i> 「強度」/「権利書, 要塞」	AC型: 1語 <i>крепость</i>
		AC型: 21[10]語 (うちAA型を旧式とするもの2[1]語 <i>ведомость, ветвь</i>)	AC型: 20[9]語 <div style="border-left: 1px solid black; padding-left: 10px; margin-left: 10px;"> AC型安定: 11[4]語 <i>лесть</i> など AA型の許容度低下: 3[2]語 <i>ветвь, новость, область</i> AA型の許容度上昇: 6[3]語 <i>пядь</i> など </div> AC ~ CC型: 1語 <i>ось</i>

3. 3. 20世紀前半までの移動アクセント型からの変化のまとめと分析

前節までの観察を, Ушаковの辞書における記述ごとにまとめると, 表(11)のようになる。少数の例外的な扱いの語を除けば, 変化が見られるのは, AA型からAC型に変化したと考えられる(6a) *дропь* および *часть* の2語と, Ушаковの辞書においてすでにAC型とされたいくつかの語のみであると言える。さらに, Ушаковの辞書においてAC型であった語のゆれや変化の方向は, AA型およびCC型に限られる。AC型とAAとの間のゆれ, もしくはAC型からAA型への変化が推定されるのは, (6a) の *власть* 「権力」, *кровь* 「血」, *полость* 「空洞」, *сельдь* 「鯧」, *сладость* 「砂糖菓子」, *честь* 「名誉」, *шерсть* 「獣毛」 および(6c) の *ведомость* 「目録」, *должность* 「職務」, *подать* 「賦税」, *пядь* 「指尺」, *снасть* 「漁具」, *стерлядь* 「チヨウザメ」の13語であり, CC型への変化もしくはゆれが見られるのは(6a) の *грудь* 「胸」, *печь* 「暖炉」,

степь「ステップ」および(6b)の ось「軸」の4語である。

(11) 古代語と19世紀の文法書における移動型アクセント語彙の20世紀からの動向

Ушаковの辞書における記述	現代の辞書における記述
(6a) AA型：3語	a. AA型：1語 пасть AC型：2語 дропъ, часть
(6b) AA型：13[3]語	b. AA型：13[3]語 голень, грязь など
(6c) AA型：2語	c. AA型：2語 мель, связь
(6b) A0型：13[1]語	b. A0(～AA)型：13[1]語 брань, печень など
(6b) 0A型：1語	0A型：1語 дебри
(6a) AC型：30[3]語 (うちAA型を旧式とするもの1語 тень)	a. AC型18[2]語 лошадь, смерть など AA型→AC型の変化途上?：2[1]語 площадь, тень AA～AC型：7[2]語 власть, полость, сладость など AC型→CC型の変化途上?：3語 грудь, печь, степь
(6b) AC型：2語	b. AC型：2語 скорбь, щель
(6c) AC型：21[10]語 (うちAA型を旧式とするもの2[1]語 ведомость, ветвь)	c. AC型：20[9]語 AC型安定：11[4]語 лесть など AA型の許容度低下：3[2]語 ветвь, новость, область AA型の許容度上昇：6[3]語 пядь など AC～CC型：1語 ось
(6b) CC型：2語 C0型：1語	CC型：3語 вошь, рожь, ложь

この変化の流れの中で、複数形のアクセント型と語幹の音節数に着目し、単音節語幹・多音節語幹の複数形のアクセント型を表(12)にまとめる。第2変化名詞を扱った安藤(2011)ではУшаковの辞書、Борунова и т. д. (1983)、Горбачевич (2004)の3つの辞書を比較したが、本節で扱う語については、難読語を集めたГорбачевич (2004)には掲載されていない語が多くあったため、ここでは21世紀の辞書としてИванова (2004)を加えた。この表では、複数形のアクセント型がA型：A型とC型の間でのゆれ(併記あるいは許容)：C型の語数を示しており、括弧内の数字はУшаковの辞書で複数形が用いられないことが明示されている語を除いた(ただし、当該の現代の辞書において複数形の語形が明示されているものは含む)語数を示す。安藤(2011)では、Ушаковの辞書とБорунова и т. д. (1983)との相違から、第2変化名詞では単音節語幹が多音節語幹に比べて早くA型に移行していることが認められた。これに対し、本稿で扱っている第3変化名詞では(12)から、単音節語幹語のみУшаковの辞書からБорунова и т. д. (1983)にかけて固定型(A型)が増加していることがわかる。このことは、2.2節で紹介したように多音節語幹語は19世紀の時点で既に変化を終え、単音節語幹語のみが20世紀中も固定型に変化し続けたことを示唆し、第2変化名詞の場合とは対照的であると言える。

(12) 語幹の音節構造による複数形のアクセント型の比較

	a. 単音節語幹	b. 多音節語幹	c. 出沒母音を伴う語幹
Ушаков の辞書	15: 0:41	3:1:14	0:0:3
Борунова и т. д. (1983)	24(13):2:39	5:3:11	0:0:4(2)
Иванова (2004)	24(17):1:33	5(4):1:13	0:0:3(2)
Горбачевич (2004)	6(3):2:25	1:5:8	0:0:4(2)

4. 現代の辞書に見られるアクセントのゆれ

本節では、現代の辞書のうち、アクセントに関する注記が豊富な Горбачевич (2004) をデータとして、前節までに見てきた語彙からさらに対象を広げて、現代のアクセントの記述を調べることにする。Горбачевич (2004) はロシア語で記述されており、対象として母語話者を念頭に置いているものと思われるが、その話者にとって難しいとされる項目を集めて掲載している。難しいと感じられるということは、そこにゆれや文体差、変化の兆しなどが潜んでいるものと考えられる。逆に言えば、通常の辞書とは異なり、語彙をまんべんなく集めたわけではないため、ここで集められた語彙の数が全体の傾向を反映するとは言えないことに注意が必要である。これはあくまで、ゆれや変化の兆しがどのような語彙にどのように認められるかを見出すための作業である。

Горбачевич (2004) における注記のうち、「и」「ならびに」で結ばれる形は許容度が同等であることを示し、規範性の高いゆれであると言える。また、巻頭の記述によれば、「допустимо」「許容される」は許容される形のうち新しい形、「не рекомендуется」「薦められない」は観察されるものの現在薦められる形ではないが、今後の変化により認められる可能性があるとするものであり、共に新しい形の範疇に入る可能性のあるものである。一方、「устарелое」「廃れた」および「устаревающее」「廃れつつある」は古い形とみなすことができる。他に、「неправильно」「正しくない」の注記も頻出するが、これは変化の方向性が明らかではないので、以下の観察では重視しない。以下では、最初に挙げられている形を規範形とし、その他をバリエーションと呼ぶ。

Горбачевич (2004) はアクセントだけでなく文法事項（複数生格形の語尾など）やアクセント以外の正音法（文字 e をストレスがある場合に /j)e/ と /j)o/ のどちらで発音するか、あるいはその文字が示す母音の前の子音を硬口蓋化するか否かなど）に関する記述のための項目も多いが、その中で、アクセントについての記述が載っているものを抽出した。見出し語はどの項目もストレス記号が付与されているが、その中で文法事項等でなくアクセントを記述するための項目であると判断する基準は、アクセントのバリエーションが記載されているか、もしくは移動型のアクセントであることが示されていることとし、パラダイムを通じて1種類のアクセントしか示されていない場合にはアクセント以外の事項についての記述がないこととした。移動型であると見なす場合には第2前置格も参照したため、これ以外の語形においてストレスが移

動しないもの（AA型）も含まれている。

対象となる語は130語あり、その中には特定の派生接尾辞を持つ語が多く含まれるほか、派生接頭辞を持つ語や複合語も含まれる。

4.1. 単純語のアクセント変化

Горбачевич (2004) から抽出した語の中で、語根および格語尾のみから成る単純語のうち、ここでは Крысин (2008) 等の借用語辞典によって借用語と確認された語を除いて変化の様子を見る。借用語のアクセントについては Суперанская (1968) 等の先行研究があり、これとデフォルトアクセントとのかかわりについては安藤 (2010) で論じられているが、Горбачевич (2004) に記載されている借用語のアクセントについては、他の屈折タイプの名詞と併せて稿を改めたい。

ここで単純語と呼ぶデータは50語ある。そのうち4語（*корысть*「食欲」、*плоть*「肉体、肉欲」、*пыль*「埃」、*тишь*「静寂」）は Ушаков の辞書で複数形が用いられないとされており、Горбачевич (2004) でも複数形は明示されていない。

複数形が用いられる語のうち、バリエーションを含めても単数形が移動型になることのない語は40語あり、その規範形とバリエーションの分布を、注記の種類ごとに表(13)に示す。表では、左列が規範形であり、バリエーションを持つ語がその右に示されている。規範形とバリエーションの双方について、語幹内のストレス位置を語幹末からの位置でローマ数字 (I, II…) によって示し、該当語数をアラビア数字で示す。なお、括弧内はストレス位置が語頭に一致する語数（内数）である。なお、*дочь*「娘」、*мать*「母」の2語は、単数生格以下は語幹がそれぞれ дочер-, матер- となり、単数形および複数主格形はストレスが語頭音節に置かれるため、表では規範形 АСII に算入している。また、規範を АAI とし「その他」のバリエーションを持つ *боль*「痛み」1語は、「в речи медиков」（医療者の発話において）という注記付きで АCI となっている。

(13) 単純語のうち単数形語幹固定アクセントを持つ語のアクセントのバリエーション

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устаре- лое	устаре- вающее	その他
AAI-10(9)	ACI-2(2)		ACI-1(1)	ACI-2(1)			ACI-1(1)
ACI-21(20)	AAII-1(1)		AAI-1(1)		AAI-2(2)		
АСII-9(9)	AAII-3(3)					AAII-1(1)	

ここで取り上げられている語のほとんどが、語幹にストレスを持つ場合は語頭音節がそれを担い、2音節語幹語でも第2音節がストレスを担うものが少ない（例外は規範形 АCI と「и」で並記される АAII の *сажень*「サージェン（長さの単位）」のみ）という点で、4.3節で見る接頭辞

を持つ語の場合と類似している。また、変化の方向としては、AA型が古くAC型が新しいというパターンがわずかながら観察される。

一方、バリエーションを含めて単数形での移動型が挙げられている語は6語ある。そのうち2語 (*вошь* 「しらみ」、*рожь* 「ライ麦 (単数形)、ライ麦畑 (複数形)」) は語幹の唯一の母音が出没母音であり、必然的にCC型となる。また *грудь* 「胸」1語が単複両形において規範形を移動型(CC型)とされており(AC型は「廃れつつある」とされる)、さらに *цепь* 「鎖」1語がAC型とCC型の併記となっている。また、AC型を規範とする語のうちの2語 (*ось* 「軸」および *печь* 「暖炉」) は単数形での移動型(CC型)を許容されている。

なお、この単純語として挙げられた語の中には、第2前置格を持つもの(バリエーションを含めて22語)が多く含まれるという特徴が見られる。したがって Горбачевич (2004) に掲載されている目的も、第2前置格の明示であると思われるものも含まれている。また、複数造格形が古い形の語尾 *-ьми* を持つもの(バリエーションを含めて7語)が存在することから、保守的な形態を持つ傾向があると考えられる。

4.2 派生接尾辞を持つ語のアクセント変化

ここでは、固有語と借用語を区別せず、特定の派生接尾辞を持つ語を取り上げる。派生接尾辞の種類により語のアクセント型の分布がかなり規定されることが Суперанская (1968) などから明らかになっているためである。ここで扱う接尾辞は、*-ость* (*-н-ость*, *-енн-ость* を含む) および *-ть* である。これらが接尾辞として含まれるか、語根の一部あるいは他の接尾辞の一部として含まれるかは、Кузнецова, Ефремова (1986) の形態素辞典によって分け、この辞典によって独立した形態素でないとされるものは本節のデータから除外した。以下、4.4節までの本文中では、この辞典に従って綴り字上の形態素境界をハイフンで標示し、語根に当たる部分に下線を付す。

なお、集めたデータには上述のもの以外の派生接尾辞を持つ語も含まれているが、例が少なく個別的であるため、4.2.3節でまとめて扱うことにする。

4.2.1. 語尾 *-ость* を持つ語

語尾 *-ость* は生産性が高く、これを持つ語は、形容詞や形動詞の語幹を語基とする抽象名詞や形容詞や形動詞が示す状態を属性として持つものを表す語が多い。このため、複数形が用いられない語も多く、当該のデータが27語ある中で、Ушаков の辞書で複数形がない (*мн. нет, только ед.*) とされていた語は約半数の13語である。Ушаков の辞書で複数形がないと明記されていない語では、移動型の複数形が示された語が8語、語幹固定型の複数形が示された語が1語、複数形の記載がないものが5語である。

Ушаковの辞書で複数形がないとされた13語のうち10語は、-остьの前にさらに形容詞の派生接尾辞-еннを持っているが、Редькин(1972)によれば、この接尾辞-еннは語幹固定アクセントを持つ名詞語根につくときはその語根固有のストレス位置を保ち、それ以外の名詞語根につくときは接尾辞の直前の音節にストレスを置く一方で、形容詞語根につくときは接尾辞自体がストレスを担う-ённとなるものである。さらに、[語根-енн]からなる語基に付加される-остьは語基のストレス位置を保つ性質があるため、結局、語根本来の品詞やアクセント特性によって派生語 [[語根-енн]-ость]のストレス位置が決まることになる。しかしここでは、語根本来のアクセント型や語根に接頭辞が付加された複雑な構成を持つ語基のアクセントに立ち入ることは、不確定な要素が多いため敢えてしない。語尾-енн-остьを持ち、Ушаковの辞書で複数形がないとの記載がない2語 (о-зд-об-л-енн-ост-ь「憤り」、не-до-гов-ор-ённ-ост-ь「言い残し」) も含めた12語のうち、Горбачевич (2004)においては規範としてоб-остр-ённ-ост-ь「緊迫性」など5語が語幹次末音節(すなわち接尾辞-енн)、у-'ниж-енн-ост-ь「屈辱」など7語が語幹前次末音節(すなわち接尾辞-еннの直前の音節)にストレスを持つ(いずれも語幹固定)が、いずれも-остより左のいずれかの音節にストレスを持つバリエーションが‘неправильно’, ‘устарелое’, ‘устаревающее’などの注記を添えて挙げられている。つまり、語根のタイプを無視すればРедькин(1972)の記述と矛盾しない範囲でのゆれや変化が観察される。

なお、Горбачевич (2004)においては、複数形が用いられるAA型の語も複数形が用いられないA0型の語も同様に単数形のストレス位置のみが示されている場合が多い。このため、Ушаковの辞書で複数形がないとされた語については現代でも複数形が使われないのかどうか判断が難しい。そこで以下では、Ушаковの辞書で複数形がないとされるなど複数形の使用が疑わしく、かつГорбачевич (2004)において単数形A型の記述しかない語については、Иванова (2004)などの現代の辞書によって複数形A型の記述が確認された場合のみ、AA型として扱うこととし、複数形の使用が確認されない語は以下で複数形を持つ語としての分析から除外する。すると、上記の語尾-енн-остьを持つ語の中で、この手続きによってAA型として扱うことになるのは、до-гов-ор-ённ-ост-ь「合意」とне-до-гов-ор-ённ-ост-ьの2語である。

Горбачевич (2004)で複数形が明示されたAA型は6語あるが、そのうち3語 (ём-к-ост-ь「容量」、тон-к-ост-ь「薄さ」、хвор-ост-ь「(俗) 病気」) はУшаковの辞書において複数形がないとされた語である。また、このAA型6語のうちのмощ-н-ост-ь「威力」1語は移動型が許容される形として挙げられている。さらに、Горбачевич (2004)において複数形の移動型アクセントが規範として明示された語は8語あるが、そのうち4語 (вед-ом-ост-ь「目録」、долж-н-ост-ь「職務」、плоск-ост-ь「平面」、пол-ост-ь「空洞」) は語幹固定型が併記されており、残る4語のうち2語 (креп-ост-ь「強度、権利書、要塞」、нов-ост-ь「ニュース」) は廃れつつある型としてAA型が挙げられている。

複数形が用いられると認められる語の規範形とバリエーションの分布を、注記の種類ごとに表(14)に示す。

(14)派生接尾辞 -ость を持つ語のうち複数形が用いられる語のアクセントのバリエーション

規範形	и	допус- тимо	не рекомен- дуется	непра- вильно	устаре- лое	устаре- вающее
ААП-10(6)		АСП-1(1)		ААП-2 АСП-3(3)		
АСП-7(7)	ААП-3(3)					ААП-2(2)
АСП-1(1)	ААП-1(1)					

語尾 -ость を持つ語の音節数は、2音節から6音節と幅広いが、ストレス位置はⅡとⅢに集中していることがわかる。特にAA型では長い語が多く、語頭音節にストレスが置かれない例があるが、AC型を規範とする語は7語が2音節語、1語が3音節語と短いため、語幹にストレスを置く語形ではすべての語で語頭音節がその担い手となっている。このように、この語尾を持つ語は、音節数とアクセントの移動性および語幹内のストレス位置がある程度の相関を持っていると言える。

また、表(14)に含まれていない、複数形が用いられない語を含めてみると、語幹固定型を規範とする語の中では、バリエーションが存在する場合の多くでストレス位置がⅡとⅢに規範形とバリエーションを持っている。一方、AC型を規範とする語では、語幹内のストレス位置のバリエーションはなく、AA型をバリエーションとして持つようである（Горбачевич (2004)に掲載された語の中でこの傾向が見られるということであり、語尾 -ость を持つ語が一般的にそうであると断言できるわけではない）。

4.2.2. 語尾 -ть を持つ語

動作の抽象名詞を作るとされる語尾 -ть を持つ語は、データの中に6語認められ、そのすべてに複数形が記載されている。5語（про-пас-ть「深淵」、с-мер-ть「死」、скатер-ть「テーブルクロス」、ста-ть「体格」、четвер-ть「4分の1」）はAC型、1語（по-да-ть「賦税」）はAA型を規範としているが、語幹はいずれも2音節以内であり、語幹にストレスを持つ語形ではすべて語頭音節がストレスを担っているという共通点がある。中でも、по-да-тьとпро-пас-тьはそれぞれ接頭辞 по-、про- も有しており、この接頭辞にストレスが置かれている。

このように、語幹の中で語頭にストレスが置かれる点は安定しており、バリエーションが見られるのは複数生格形以下で語尾にストレスが移動するか否かという点のみである。語尾 -ть を持つ語の規範形とバリエーションを表(15)に示す。

(15) 派生接尾辞-ьを持つ語のアクセントのバリエーション

規範形	и	допустимо	не рекомендо- дуется	непра- вильно	устарелое	устаре- вающее
ААП-1(1)		АСП-1(1)				
АСI-2 (2)						
АСП-3 (3)						ААП-1

語尾-тьはРедькин (1971) には取り上げられていないが, Зализняк(1985) では語頭にストレスを置く性質を持つ接尾辞に分類されている。ここに取り上げられた語例を見る限り, その性質には変わりがないが, 接辞の意識が薄れると, 4.1節で見た単純語と同様にAC型への変化の流れに乗る傾向があるのかもしれない。

4.2.3. その他の接尾辞を持つ語

Горбачевич (2004)に掲載された第3変化名詞の中には, 前2節において検討した2種類の接尾辞のほかに12種類の接尾辞を持つ語が含まれる。この12種類の接尾辞を持つ語はГорбачевич (2004)に掲載された範囲では各3語以下であり, 一つ一つの接尾辞についてまとめた検討がし難い。本節ではこれらをまとめて扱うことにする。

Горбачевич (2004)に挙げられた規範形によってこれらの接尾辞を持つ派生語18語を分類すると, AA型9語, AC型5語, 複数形が用いられないと見られるA0型が3語, C0型が1語となる。この分類ごとに表(16)に派生語と注記を整理する(注記のないものは規範形のみが掲載されている語である)。

個々の接尾辞の性質について言えば, Редькин (1972)に挙げられている接尾辞は-зньのみであり, これは直前の音節にストレスを置く性質があるとされる。ここで該当する語はбо-я-зн-ь「恐怖」1語であり, この性質に沿う語幹末アクセントとなっている。他の11の接尾辞のうち, -ль, -ньの2種はЗализняк (1985)において語頭にストレスを置くタイプに分類されている。ここで該当するのは, от-рас-ль「部門」, при-бы-ль「利益」, сверх-при-бы-ль「超過利潤」; рос-ста-н-ь「(方言で) 交差点」, при-ста-н-ь「埠頭」と見られるが, 複合語сверх-при-бы-льを除き, 語頭音節にストレスが置かれる点でこの性質に適っている(バリエーションではAC型が見られるが, 語幹にストレスが置かれる語形では語頭のストレス位置を保っている)。

このほかの9種の接尾辞については, 参照した文献ではストレス位置の予測がなされていない。傾向を把握できるほどの語数がない。しかし, 全体としてみれば, 旧式とされるバリエーションはAA型のみであり, 新しい形に付けられる‘допустимо’はAC型のみであることから, 少なくとも前節で見た-тьの場合と同様にAA型からAC型への変化の流れに矛盾はしないと言える。

(16) 派生接尾辞を持つ語のアクセントのバリエーション

a. 複数形が語幹固定アクセント型を規範とするもの

規範	-ень	-ль	-нь	-оть	-ошь	-ынь
AAI-2	ступень ₁ 「階段」			щепоть (и AAI)		
AAII-7(6)		отрасль (доп. ACII) прибыль (простор. AAI) сверхприбыль (неправ. AAI)	росстань (и ACII) пристань (доп. ACII)		пустошь	пустынь (неправ. ACII)

b. 複数形が移動アクセント型を規範とするもの

規範	-адь (-ядь)	-вь	-ень	-очь
ACI-2(1)		ветвь (устарел. AAI)	ступень ₂ 「段階」	
ACII-3(3)	лошадь площадь (устарел. AAI)			мелочь (и ACII)

c. 複数形が用いられないもの

規範	-адь (-ядь)	-ежь	-знь	-овь
A0I-2		молодёжь (неправ. A0III)	боязнь (неправ. A0II)	
A0II-1(1)	пестрядь (неправ. A0I)			
C0I-1				любовь (устарел. A0I)

4.3 接頭辞を持つ語のアクセント変化

本稿で扱う Горбачевич (2004) の掲載語の中で, Кузнецова, Ефремова (1986) により接頭辞を持つと認定できる語は 34 語である。

34 語のうち 11 語は Ушаков の辞書で複数形が用いられないとされており, Горбачевич (2004) でも複数形は明示されていない。Горбачевич (2004) において, そのうち за-ум-ь 「訳のわからないこと」は規範として接頭辞 за- にストレスを置く固定型が示され, 古い形として語根にストレスを置く形が挙げられている。また, не-на-вист-ь 「憎悪」も語頭の接頭辞 не- にストレスを置く固定型が規範とされ, 2 つ目の接頭辞 на- にストレスを置くのは正しくないとされる。残る 9 語 (規範形のストレス位置を示せば, до-говор-ённ-ост-ь 「合意」, об-о-'соб-л-енн-ост-ь 「孤立性」, об-остр-ённ-ост-ь 「緊迫性」, о-с-вед-ом-л-ённ-ост-ь 「知識」, пред-рас-по-'лож-енн-ост-ь 「素質があること」, раз-дв-'о-енн-ост-ь 「分裂状態」, раз-'дроб-л-енн-ост-ь 「分割状態」, раз-

обш-ённ-ост-ь「隔離状態」、у-'ниж-енн-ост-ь「屈辱」は接頭辞のほかに派生語尾 -енн-остьを持つ語であり、バリエーションを含めて固定型のIIまたはIIIであるとされる。さらに同じ派生語尾 -енн-ост-ьを持つ не-до-говор-ённ-ост-ь「言い残し」と о-зд-'об-л-енн-ост-ь「憤り」の2語は、Ушаковの辞書では複数形が用いられないとの記述はないものの複数形が明示されておらず、Горбачевич(2004)でも複数形が明示されていない。

一方、'от-руб-и「ふすま、ぬか」の1語は複数形のみが用いられるとされ、Ушаковの辞書では移動型のみが挙げられていたが、Горбачевич(2004)ではこれに固定型が併記されている。

34語のうち、残る20語は単数形と複数形が共に用いられると見られる語であり、そのすべてがバリエーションを含めてAA型とAC型のどちらかの記述を持つ。この20語を、語幹にストレスが置かれる場合のストレス位置に着目してみると、接頭辞 о- を持つ3語('о-пис-ь「目録」、'о-соб-ь「個体」、'о-черед-ь「順番」)、от- を持つ2語('от-мел-ь「浅瀬」、'от-рас-л-ь「部門」)、под- を持つ1語('под-пис-ь「署名」)、при- を持つ3語('при-бы-л-ь「利益」、'при-ста-н-ь「埠頭」、с-верх-'при-бы-л-ь「超過利潤」)、про- を持つ3語('про-пас-т-ь「深淵」、'про-по-вед-ь「説教」、'про-руб-ь「氷の穴」)、рос- を持つ2語('рос-ста-н-ь「(方)交差点」、'рос-сып-ь「砂鋤床」)はすべてこれらの接頭辞にストレスが置かれる形のみとされている。接頭辞 по- を持つ4語のうち3語('по-вест-ь「物語」、'по-да-т-ь「賦税」、'по-чест-ь「敬意」)もこの接頭辞にストレスを持つが、по-'верх-н-ост-ь「表面」1語は接尾辞 -ост-ь を持ち、ストレス位置は語幹次末音節(II)とされる。残る2語(с-'вяз-ь「連係」、с-'мер-т-ь「死」)は接頭辞 с- を持つが、これは母音を含まない接頭辞であり、ストレスは語根音節に置かれる。

このことから、Горбачевич(2004)で取り上げられている語彙の範囲で言えば、複数形が用いられる語も用いられない語も、接尾辞の影響を受けない限り、語幹にストレスが置かれる場合は音節を成す接頭辞がストレスを持つと言える。

一方、単数形も複数形も共に用いられる語について、AA型とAC型の分布には明確な要因を指摘することはできない。表(17)では、最初に挙げられた形を規範形として左列に配し、別の型をバリエーションとして持つ場合はその注記を添えて接頭辞ごとに該当する語数を示している。これを見ると、全体の語数が少ないため断言はできないものの、AA型を規範とするAC型のバリエーションに‘допустимо’および‘не рекомендуется’の新しい形に対する注記が多いことから、単純語などの場合と同様にAA型からAC型への変化の方向性がある可能性が認められる。

(17) 派生接頭辞を持つ語のアクセントのバリエーション

規範	о-	от-	по-	под-	при-	про-	рос-	с-
AA	2	1 1(доп.АС)	1 1(доп.АС) 1(устарел. АС)	1(не рек. АС)	2 1(доп. АС)	2(не прав. АС)	1 1(и АС)	1
АС	1(и АА)		1(и АА)			1(устарев. АА)		1

4.4 複合語のアクセント変化

本節では、Горбачевич (2004) のデータの中に8語見出される複合語について整理する。

まず、規範形を示すと 'икон-о-пис-ь 「聖像画法」, 'ино-ход-ь 「(馬の) 側対歩」, 'пол-ноч-ь 「夜半」 の3語は Ушаков の辞書において複数形が用いられないとされ、Горбачевич (2004) においても複数形の記載がない。この3語はいずれも単数形で語幹固定アクセントを持ち、そのストレス位置の規範はいずれも語頭音節である。しかし注記は様々であり、пол-ноч-ь は生格形の第2音節 (第1 語根に付加された母音 y を含む音節) にストレスを置く形 (по'луночи и 'полночи) が併記されており、ино-ход-ь は第3音節 (第2語根) のストレスが 'неправильно', икон-о-пис-ь は第2音節 (第1語根) のストレスが 'не рекомендуется' とされている。

次に、複数形を持つと見られるものについて言えば、そのうち4語が規範として AA 型とされ、その中の 'кон-о-вяз-ь 「馬の繫柱」, 'лет-о-пис-ь 「年代記」 の2語が語頭音節にストレスを持つ。しかし前者は第3音節 (第2語根) のストレスが 'допустимо', 後者は AC 型が 'неправильно' の注記を持つ点で異なっている。また、複数形を持つ AA 型規範のうち、свет-о-'тен-ь 「明暗」 は第3音節 (第2語根), сверх-'при-бы-л-ь 「超過利潤」 (4.3 節でも検討した接頭辞 при- を持つ語) は第2音節 (第2語根に付加された接頭辞) にストレスを持つとされ、前者は AC 型が 'не рекомендуется', 後者は AC 型が 'неправильно' の注記を持つ。残る1語 (пол-у-'тен-ь 「薄闇」) は AC 型が規範とされ、AA 型は 'устарелое' とされる。

このように、複合語のアクセントは、語幹音節数が多い割には語頭音節にストレスを置くものが多いとは言えるが、総数が少ない中で変化の傾向を見出すことには無理がある。

5. まとめ

本稿では、現代ロシア語の名詞パラダイムにおけるアクセントの型のうち第3 変化名詞を取り上げ、文献から推定されるゆれと変化の方向性についてデータを分析した。

その結果、第3節では、19世紀以前の文献で複数形が移動型アクセントを持つとされた語において、20世紀の文献で指摘された AC 型と AA 型の混じり合う変化のうち、20世紀以降の資料では AC 型から AA 型への変化がやや優勢であることが明らかになった。さらに、20世紀中の変化の主体は主として単音節語であることが示された。

また、第4節では、かつてのアクセント型を考慮せずに、現在ゆれや変化が見られる語彙を中心に第3変化名詞を集めて分析することにより、この範囲の単純語、複合語および接頭辞を持つ語では、安藤(2010)等の先行研究でデフォルト性が明らかになっている語幹末アクセントとは異なる語頭音節にストレスを持つ語が優勢であることが示された。さらに単純語および接尾辞あるいは接頭辞を持つ語では、AA型からAC型への変化の傾向について可能性が示唆された。

第1節で述べたとおり、本稿は、実際の話者を被験者とした調査を計画するための予備的調査に過ぎず、また、ここで扱っていない名詞も多く残されている。今後もさらなる調査が必要である。

参考文献・資料

- Аванесов, Р. И., Ожегов, С. И. (ред.) (1959) *Русское литературное произношение и ударение*, Государственное изд-во иностранных и национальных словарей.
- Булаховский, Л. А. (1954) *Русский литературный язык первой половины XIX века*, Государственное учебно-педагогическое изд-во министерств просвещения РСФСР.
- Борунова, С. Н., Воронцова, В. Л., Еськова, Н. А. (1983) *Орфоэпический словарь русского языка*, Русский язык.
- Воронцова, В. Л. (1979) *Русское литературное ударение XVIII-XX вв.*, Наука.
- Востоков, А. Х. (1831) *Русская грамматика, Александра Востокова, по начертанию его же сокращенной грамматики полнее изложения*, Типография И. Глазунова.
- Горбачевич, К. С. (2004) *Словарь трудностей современного русского языка*, Норинт.
- Зализняк, А. А. (1985) *От праславянской акцентуации к русской*, Наука.
- Иванова, Т. Ф. (2004) *Новый орфоэпический словарь русского языка*, Русский язык – медиа.
- Колесов, В. В. (1972) *История русского ударения. Именная акцентуация в древнерусском языке*, Изд-во Ленинградского университета.
- Крысин, Л. П. (2008) *Иллюстрированный толковый словарь иностранных слов*, Эксмо.
- Кузнецова, А. И., Ефремова, Т. Ф. (1986) *Словарь морфем русского языка*, Русский язык.
- Редькин, В. А. (1971) *Акцентология современного русского литературного языка*, Просвещение.
- Резниченко, И. Л. (2008?) *Словарь ударений русского языка*, Аст-пресс.
- Розенталь, Д. Э., Теленкова, М. А. (1976) *Словарь трудностей русского языка*, Русский язык.
- Суперанская, А. В. (1968) *Ударение в заимствованных словах в современном русском языке*, Наука.
- Ушаков, Д. Н. (ред.) (1934-40) *Толковый словарь русского языка*, Государственное изд-во иностранных и национальных словарей.
- Хазагеров, Т. Г. (1973) *Развитие типов ударения в системе русского именного склонения*, Изд-во Московского университета.
- Федянина (1982) *Ударение в современном русском языке*, Русский язык.
- Чернышев, В. И. (1908) *Законы и правила русского произношения, Избранные труды в двух томах*, Просвещение, 1970.
- 安藤智子 (2010) 「現代ロシア語名詞アクセント法にかかわる形態論的・音韻論的条件の関係について」『富山大学人文学部紀要』53: 25-49.
- 安藤智子 (2011) 「ロシア語名詞アクセントのゆれと動態に関する予備調査 (1) — 第2 変化名詞 —」『富山大学人文学部紀要』55: 37-63.

注

- 1) 第3 変化名詞の枠組みには、単数主格形が硬口蓋化子音に終わる女性名詞のほかに、類似した屈折形態を持つ男性名詞 *путь* および *-мя* に終わる 10 の中性名詞を含むのが普通だが、アクセントの観点からは相違が大きいので、本稿ではこれらを調査の対象外とする。
- 2) Резниченко の辞書は書誌情報が明確でなく、出版社の HP によれば 2010 年刊行とされるが、筆者が入手したのは 2008 年のことであったため、本稿では刊行年を (2008?) としておく。